

白銀に舞う

喜多川雅人

高原の冬の朝は *crisp* だ。森の下方から静かに頭をもたげつつある朝日でうつすら明るくなった七時、一郎は、目覚ましが鳴るのを待ちかねたように飛び起きた。テラスに出ると、思いつきり手足を伸ばして、清浄な空気を胸いっぱい深く吸いこむ。すっかり葉を落とした唐松林の合間から、谷越しに甲斐駒と北岳がぼんやりと白く浮かぶ。

一月末の風はしびれるほどに冷たいが、格好のスキー日和のようだ。一年ぶりに滑るのだ。久し振りに恋人に会うみたいにくわくわくしている。古希を迎えたというのにいつまでも変わらない。

スキーは、単身赴任の札幌時代に習った。接待などがない平日の夜、宮の森ジャンプ台に連なるスキー教室に通い、オーストリア流のパラレルクリスチャニアを、名物校長から厳しく仕込まれた。北海道人がいう「内地」に戻る辞令が出る直前に二級に合格。銀メダル獲得の高揚した気分だった。

現役を退いた十年前、八ヶ岳南麓に小さなログハウスを建てたのは、歩いても行ける距離のところで、スキー、テニス、ゴルフができるというのに惹かれたからだ。温泉もある。ところが、別荘地は、それらの醸し出す喧騒と上手に区切られて閑静である。

連れ合いはスキーをやらないので、冬の山荘行きは「単身赴任」である。薪ストーブで暖をとりながら、前夜のうちに用意した軽い朝食をすませると、床に拡げて暖めておいたウエア一式をそそくさと身に着けた。出発前の仕上げは、香りの強い濃いめのコーヒー。

トニー・ザイラーに憧れていた一郎は、札幌時代に、「黒い稲妻」のザイラー流の黒いウエアを求めた。綿のワンピースである。このごろ流行の軽量でも保温に優れた化繊のウエアと違って、高齢者にはずっしりと重たいが、今風に楯突く意固地なところがあって、時代錯誤のようなそれに拘っている。

板もしかり。自分の身長ほどもある長いやつだ。黒がベースで、細く赤い縦線がアクセントをつけている。誰でも難なくすうつと曲がれる、今時の先が太くて短いカービング・スキーなんてクソ喰らえという頑迷さだ。

本音をいえば、先行き幾許もないスキー歴だろうから、年金をやりくりして新しいのを購入するのに躊躇いがあるのだ。

サンングラスもブラック。ストックだけがホワイト。

スキー帽も黒だったが、流石に草臥れたので、今年は新しいのに買い換えた。黒とグレイの毛糸で編まれたもので、耳がすっぽり隠れ、寒風から守ってくれる。大柄な身体のわりには顔や頭が小ぶりな一郎には、ちよつとゆるいのが気になるところだ。とんがり型で、全体が頭髮にぴったりというのではないから、三角にとがった突端は風を受けるとなびく。スキーで滑降すると時速で一〇〇キロはオーバーするから、それが不安といえなくもない。

ウエアは別として、今年は新しい試みに挑戦した。

頭髮が年々薄くなり、ごく粗いバーコードになってしまった。お洒落な一郎には耐えられないほどに劣化したので、年明けに初めてヘアウィッグなるものを買ったのだ。

年末にクリスチャンの親友が昇天し、教会で告別式が行なわれた。一階の前方に座った一郎を、二階席に陣取った友人たちが、式後、「お前の頭が光りすぎて大変だったよ」と茶化すではないか。前髪はなんとかバーコードで凌げるが、天辺から後ろにかけてはツルツルパゲらしいのだ。その一言で踏ん切りがついたようなものだ。

通販で届いたのは、人工毛の貼り付けタイプだ。ネットで慎重に調べあげて選択したものだ。値段から察しても、耐久性にはやや問題がありそうだが、「自然感重視」というのが気に入った。テレビのCMで、モデルの高齢者の、それをつける前とつけた後の写真が並んでいた。高齢者が壮年時代に戻ったようなえらい違い方なのだ。それが決め手になった。

他に、フリーベール・タイプとか、マイクロチェンジ・タイプとか、やたらに難しい横文字名の商品が並んでいたが、そういうのは二十万円とか一桁違うお値段だ。まずは貼り付けタイプの手頃なのを選んだ。

馴染みの床屋で自毛をカットしてもらって貼り付けると、なんとか違和感がないルックで満足。真つ黒くなくグレイっぽいのがいかにも自然でよろしい。

男前が上がり、老ザイラー気取りである。

下心がないではない。このところ毎年スキー場で顔を合わせる熟年の女性が現われたのだ。四十前後だろうか。

一郎は、土曜に来て、日曜の朝、リフトが動き始める九時に、八ヶ岳南麓の富士見高原スキー場に「入社」、人工雪で綺麗に整備されたセンターゲレンデなどで一時間半、回数にして十五本滑る。

スキー教室が始まる十時半に、親子連れなどで混み合っていると、さっと切

り上げて「退社」。隣接する温泉で疲れを癒す。初級者が転んだり、斜面の途中で止まっていたりして、ゲレンデも荒れてくるのが嫌なのだ。

同じ行動パターンをとる上級者が何人かいて、その一人が彼女である。

偶然にも同じ黒ずくめで、たまにリフトの順番を譲ったときに綻ぶ唇が魅惑的である。大きな丸型の黒いサングラスで小ぶりの顔が隠されるため、地味はしらないが、細身で、映画「シャレード」のスキー場面に現れる黒ずくめのヘップバーンに似た雰囲気がないでもない。一郎とは親子ほどの年齢差がありそうだが、典型的なB型の一郎はそんなことにはおかまいなしだ。

可笑しな話だが、一郎は、戦時中だった小学生の頃の検査ではA型だった。

それが大学に入ってしばらくしてからの体格検査ではB型に変わっていたのだ。

一人息子で甘やかされ、頼りなかった一郎だが、大学一年のとき、赤線がなくなるというので、悪友に誘われて向島の花街に連れて行かれてからは、見違えるように変身して、なにかと積極的になった。こうと決めると猪突猛進して極めるまでやる。B型に変わったのはその頃である。

真相は、戦時中の検査は間違いが多かったというから、生来Bだったのに、Aとされていたのだろう。そういえばその頃までは、なにごとにもうじうじして及び腰だったが、それは性格というよりは、過保護に育てられたせいかもしれない。

ヘアウィッグ効果で、今日は十歳は若返った。オードリーは、一郎の禿頭を知らない。運よく今日も現れたら、同じタイミングで板を脱ぎ、レストハウスのカフェテリアにでも誘ってみよう。いつも一人で滑っているから、ひよっとすると同じ別荘村の住人で、連れ合いを亡くした未亡人かもしれない。東京の外資系商社のキャリアウーマンで、週末は親が残した富士見高原の別荘で過ごしているとか……。

滑り方はかなりのレベルで、カービング・スキーで小回りも鮮やかに決めている。

背は低いが、スキー道具一式が楽々積める中型のワゴン車を駆って、いつもより早く八時半にはいそいそとスキー場に到着。たっぷり準備運動をしてから、半日券のリフト券を求めていると、オードリーが現れた。ついでに胸が高鳴る。

九時にリフトが動き始めると、いつものパターンで、最初の一本は、初心者向けのロマンスゲレンデで、大きく弧を描きながら一本足慣らしする。

オードリーも一足遅れて同じように滑り降りたようだ。

二本目は、センターゲレンデの途中まで登るリフトに移り、中どころの斜面で一本滑り、そのままセンターゲレンデのメインリフトに移って、ゲレンデの頂上まで昇る。オードリーもなぜか同じパターンである。なんのことはない、去年、彼女がそういうパターンなのを見極めていたのだ。ストーカーみたいなものである。

センターゲレンデは、最大傾斜が二六度ある。平均斜度は十七度。世界アルペンスキーで大回転に使われるオーストリアなどのコースもその程度らしいから、距離こそ六〇〇メートルと短い、上級者も結構楽しめる。

リフトの終点は標高一四〇〇メートル。ゲレンデの正面に南アルプス、右手遠方に北アルプスや諏訪湖などが遠望できる。リフトの降り場から続く遊歩道で、高台まで十分ほど足を運べば、見事な富士山が望める。富士見高原の名前の謂れである。

リフトで揺られながら登る五分間は、集中して沈黙考する絶好の場だ。

最初は、今年は何にを、どのようにやるかといった「事業計画」を考える。

二回目は、年金生活だから、乏しい資産の運用についてもあれこれ愚考。親が二年前亡くなっていろいろ整理が終ったら、「そろそろ自分の相続についても考えておいてよ、相続制度も変わるようだしね」と、長男にそれとなく促がされたのである。

三回目は、二回目の滑りを反省、昔習った基礎の型を今一度思い出す。

四回目は、連れ合いとの関わり。年のせいもあって、会話がちぐはぐになることが多く、どちらか短気になってつまらぬことでこじれる。お互いに一方的に言い合っただけでやりとりがないのだ。年上のこちらが反省せねば……。

一本滑るごとに、新しいテーマで沈黙考して、そのときなりの結論をだし、なぜかほつとしたり……。その合間にオードリー攻略法を思考したり……。

静寂の世界で、座禅を組んで雑念を拭うようにいかないのがちと情けない。

そんなことを十回ほどやるわけだ。

リフトが終点に近づく最後の一分は、その回の滑りの組み方を決める。

六〇〇mのセンターゲレンデは、リフトを降りてすぐは十度ほどの緩やかな斜面。一〇〇mほど滑ると、急に斜度がきつくなり、まもなく最大斜度二六度に差し掛かる。それが終ると二十度くらいの中程度の斜面、最後は緩斜面が大きく拡がってゴールとなる。

一郎の選択は、小回りで入り、最大傾斜は中回り、それが終ると大回りのパラレルクリスチャニアでゴールインするパターンが多い。時々ヴァリエーションで、組合せに変化をつける。

オードリーも同じようだが、組合せによるコース取りやスピードに差が出るから、リフトに乗るのがいつも同じ順番というわけにはいかない。数台遅れたら、先になつたりするわけだ。

十時頃には東から昇った太陽でゲレンデが緩みはじめる。左端の斜面は唐松林の影になってアイスバーンが残るから、右側との雪質の違いを意識して、滑り方を工夫して楽しむ。

転倒もせず、心地よい疲労感を憶えはじめた十時半前、最後の一本になった。北風が強まってきた。ゲレンデの下方から、冷たく吹き上げる。風当りは、最大傾斜に差し掛かったところが一番厳しい。

十四本目を無事終えて、リフトを待つ列につくと、オードリーがすぐ後ろについている。チャンスだ。いつもの例だと、これで彼女も上がるだろう。振り向くと、心なしか頬が緩んでいるようだ。ひよつとしたら誘われるのを待っているのかも……。

先に滑り終え、板と帽子を脱いで彼女を待とう。温泉に誘ってみるか、あるいは、レストハウスの二階でコーヒー？ 夜は、小淵沢のフランス料理、二人の別荘は意外に近いことが分かり、その帰りに一郎のログハウスでリキールなど……。映画「黒い稲妻」のDVDもある。灯りを間接に落として、それを観るうちに時計は夜半に。疲れと酔いとムードで身も心も緩み……。たまに連れ合いから様子窺いの携帯が掛かることがある。オードリーの肩を抱き寄せた瞬間に着信音の「アメイジング・グレイス」が鳴ったらぶち壊しになる、オフにしておくのを忘れないようにせねば……。

B型の独りよがりな妄想は弾む。なんだかむずむずしてきた。

リフトで揺られながら、五分間でしつかり戦術を練り、最後の一本を滑り始めた。リフトを降りてすぐの緩斜面は、彼女が後ろからくるのを意識しながら、いつもよりスピードを上げて、小回りで快調に飛び出した。

なぜか風が一段と吹き上げるなか、急斜面に差し掛かったところで前傾が崩れて一瞬棒立ちに。やばい。立て直そうとしていると、すぐ先を滑りおりていた男性がなぜか急に斜面で止まるではないか。危ない。それを避けんと右足に力を入れたタイミングで棒立ちに……。そこに凄まじい突風が襲って、緩めを案じていたスキー帽がふわーっと飛び去ってしまった。

「ああーっ」、思わず叫ぶと、今度は足をとられて派手に転倒した。帽子が十五メートルも上方に残っている。

なぜか頭が寒い。ふと気がつくとき、ウィッグも帽子と一緒に飛んでいるではないか。なにかに引っかけかけて、瞬間の凄いい力で、剥がれてしまったのだ。なんとという無様、無残……。

冷たい強風が容赦なく吹きつけ、鼻水だけでなく涙も滲んできた。情けない。

ストックを杖に立ち上がろうともがいているとき、後発のオードリーが華麗にシユプールを描いて停まり、帽子をひよいと拾うと、可愛い唇を緩めながら、無言でそれを渡してくれた。ウィッグも帽子にしっかり収まっていた。

大きな黒のサングラスで表情は窺がえないが、オードリーは、こんなことを呟いていたに違いない。

「いやだ、この爺さんツルツルツパゲなんだわ。ちょっと気取ったムードがあるからどんな人かと思っていたのに……。いつも私と一緒になるように滑っていて、ストーカーみたい」。

なんとか立ち直し、滑り降りると、一足先に板を脱いだオードリーは、彼女と同年輩の格好よい長身の男性の出迎えを受けて、にこやかに談笑していた。

(完)